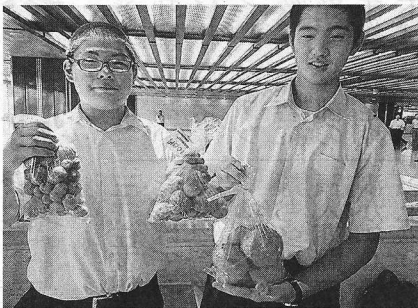


東日本大震災を機に早大と山形県高島町の星寛治さんら有機農家の有志が始めた「たかはた共生プロジェクト」は、田園の自然・暮らしを活用した農家体験や野菜作りを柱に、風評で失われた生産者と消費者の信頼を取り戻し、その関係を次世代につなぐための新しい「提携」のあり方を模索することになりました。

東北復興日記

172



早稲田大学早稲田環境学研究所講師 たかはた共生プロジェクト副代表
吉川成美さん



自給自足でつながる

まず農産物の流通・分配方法について経済的に無理のない、継続可能な提携を実践する「青鬼クラブ」が二〇一三年にスタート。町出身の童話作家浜田広介の「泣いた赤鬼」に登場する青鬼にちなんで名付けたものです。

クラブの会員は大学生や教員、首都圏の市民ら四十人。有機栽培で天日乾燥したコメを毎月二十五〜三十人が、三口、五口、十口などのコースを選び、毎月宅配で入手します。また、非常時に互いの生活を助け合う「震災協定」を結び、農家と消費者が一緒にな

って「自給自足」の価値を共有する「青鬼農園」も始めました。風味豊かなソバをはじめ、名物の青菜、大根など八品目ほどを農家の指導のもと、会員らが栽培するものです。

高島では全ての学校で農業を学ぶ「耕す教育」を一九七六年から実践していますが、この青鬼農園は高島第三中学の学校農園と同じ農地をお借りしたもので、中学生たちも夏野菜を育てています。写真。

農業と食について対話し発信する「青鬼サロン」も二〇一三年から開始。昨年九月には毎日新聞本社(東京都千代

田区)一階「毎日メディアカフェ」で、高島第三中の修学旅行生が育てた野菜を、価格や売り方を考え、自分たちで販売しました。ジャガイモやスイカ、枝豆など二百口の農産物は十五分で完売。震災後の思いを込め、「ふるさと」などの合唱曲を披露する場面では、行き交うサラリーマンが足をとめ、思わず涙を浮かべるシーンもありました。風評被害を打開する消費者と生産者の信頼関係「提携」の結び直し、分かち合い社会の実践が始まっています。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。